

## 息の長い交流の実現に向けて

静岡県企画広報部地域外交課

### 1 はじめに

日本における 98 番目（当時）の空港として、平成 21 年（2009 年）6 月に開港した富士山静岡空港。開港当初の国際線はソウル、上海の 2 路線のみでしたが、新たに台湾桃園との路線が開設されたのは、空港が開港してから 2 年 9 か月あまりを過ぎた平成 24 年（2012 年）3 月のことでした。

日本の地方自治体が、こぞって台湾における観光誘客や路線誘致を積極的に展開しているなか、富士山静岡空港と桃園、高雄、台中、花蓮の各空港とを結んだ 190 便ほどのチャーター便運航実績と日台間のオープンスカイ協定締結が追い風となつての路線開設となりました。

この路線の開設は、表面的には時流に乗ったタイミングの良い取組みの結果として捉えられますが、静岡県内はもとより台湾における関係各位の理解と協力、そして熱い思いの結実と言えます。

本県と台湾の関係は、路線の開設を前後にターニングポイントを迎えたと考えられますが、その関係には、あまり知られていない歴史があることを、次に御紹介します。

### 2 静岡県と台湾の歴史的なつながり

#### （1）サトウキビ栽培地の北限

6 月、台湾では梅雨が明け、じりじりとした本格的な南国の夏が始まります。外に出ることも億劫になるほどの炎天下、屋外で作業する時には、ミネラル分や水分を補給し、熱中症を予防しますが、口に含むものとして一番のお勧めは、天然成分たっぷりの黒砂糖です。

黒砂糖の原料は、御存知のとおり、甘蔗（かんしゃまたはかんしょ）つまりサトウキビです。現

在、日本では、そのほとんどが沖縄県、鹿児島県で生産されていますが、サトウキビの栽培地の北限は、北緯約 34 度に位置する静岡県掛川市（旧大須賀町横須賀）であることを御存知でしょうか。

静岡県でのサトウキビの栽培は、江戸時代に遡り、精製された砂糖は「横須賀白（よこすかしろ）」の名で全国に販売されていました。もともとは、当時この地を治めていた横須賀藩藩主西尾家の家老である潮田覚右衛門の次男信助が、この地域にはまだなかったサトウキビの栽培法や製糖法を土佐の国（高知県）から持ち帰り伝えたことが始まりとされていて、現在では、その伝統を受継ぐ地元の方々が、土佐の国の人々に感謝の意を込め、甘蔗（かんしゃ＝感謝）糖と名付け、販売を続けています。

台湾は日本統治時代、砂糖の一大生産地として位置づけられ、多くの日本人が海を渡っています。サトウキビという作物に関する静岡県と台湾の意外な共通項において、台湾における歴史の 1 ページに、本県出身の人物がその名前を残しています。

#### （2）歴史に名を残した静岡県人

「横須賀白」より時代を下った明治時代、サトウキビの栽培地北限の掛川市の北に隣接する静岡県森町に、良質な砂糖を溶かして結晶化させて作る氷砂糖の製法を発明した人物が現れました。

その人の名は、鈴木藤三郎。明治 16 年（1883 年）当時、鈴木藤三郎は森町で家業である菓子商を営んでいましたが、氷砂糖製法を確立させると、立て続けに、白砂糖の製造、製糖機械の発明、日本精製糖株式会社（現：大日本明治製糖株式会社）の創立と、本格的な製糖事業を展開しました。

日清戦争後、日本統治のもと、経済の中心に製

糖業が位置づけられていた台湾で、明治 33 年 (1900 年)、製糖技術に精通していた鈴木藤三郎は、台湾製糖株式会社初代社長に就任しました。そして、北回帰線 (北緯約 23 度) を越えた熱帯の地、台湾南部の橋頭 (現高雄市) に、最初の工場を建設し、のちの台湾製糖株式会社発展の基礎を築いています。

鈴木藤三郎が、氷砂糖の製法を発明したその年、森町の西に隣接する静岡県袋井市に、後に台湾製糖株式会社に 25 年間籍を置くこととなる鳥居信平が生まれます。

日本統治時代の台湾で農業水利事業に大きな貢献をし、「嘉南大圳 (かなんたいしゅう)\* の父」と呼ばれる八田与一が、まさに嘉南大圳建設 (大正 9 年 (1920 年) ~ 昭和 5 年 (1930 年)) に取組んでいたところ、それより少し南に下った屏東県林辺溪で、鳥居信平は、世界でも珍しい地下ダムの建設に取組み、それを完成させました。

屏東県が位置する台湾南部は、現在でも台風が直撃する地域です。台湾での製糖業を支える台湾南部のサトウキビ畑を風水害から守るため、治水や灌漑に土木技術者を必要としていました。台湾に渡った鳥居信平は、現地の自然をじっくり観察し、風土に適したダムを地元の方々と共に築いたのです。

鳥居信平と八田与一の共通点は、旧制第四高等学校 (金沢) と東京帝国大学に学び、台湾で農業土木に携わったこと、そして作られたダムと灌漑施設が今でも大切に使われていること、そして、2 人の日本人が今でも台湾で語り継がれていることです。年齢は、鳥居信平の方が八田与一より 3 つ年上と近く、当時の台湾で 2 人が同志あるいはライバル意識を持ち、ともに切磋琢磨しながら仕事に没頭していたことでしょう。

\* 台湾南部の嘉義県と台南市にまたがり、烏頭山ダムと、嘉南平野に 16,000km にわたってはりめぐらされた水路からなる水利施設

### 3 静岡県の“くにづくり”と台湾

日本の理想郷として、“くにづくり”を進める静岡県は、日本の一地方としてのみならず、富士山のように憧れを集め、誇りや尊敬の対象として存在する“ふじのくに”として、近隣の諸外国・地域と相互にメリットのある民間団体や企業、県民等の交流を促進することにより、県勢の一層の発展に努める“地域外交”を展開しています。

本県では台湾との交流促進に当たり、このような方針のもと、台湾へ働きかけるために、本県から積極的に台湾に足を運ぶことを大切にしてきました。路線の実現は、そのような働きかけの結果としての一里塚に過ぎません。

#### (1) 台湾を知ることから

これまで、静岡県では、県内において、台湾に関する情報を広く県民に伝え、興味を持っていただくため、台湾観光協会と協力して実施した台湾観光 PR、航空会社と協力して開催した旅行会社対象のセミナー、台湾を良く知る方々による県民向けのトークショーやテレビ・ラジオ番組の放送等により、台湾を以前より身近に感じていただけるよう工夫を重ねてきました。

これらの周知等により、県民の台湾への関心が高まり、定期路線開設前には、県内の民間機関、自治体等が、積極的にチャーター便を利用して本県から台湾へ向かい、同じ機材で多くの台湾の方が本県を訪れてくださいました。

本県では、路線が開設された現在でも、関心を高める周知活動を継続していますが、このような取組みが、台湾側から評価され、日本の自治体としては初となる「台湾観光貢献賞」の受賞 (2013 年 2 月) につながったと考えています。

#### (2) 交流のひろがり

以上の取組みのほか、本県と台湾において、同



注釈：路線開設を県民に広く知らせるポスター

じ分野で活動する人々が出会う機会も増えていきます。本県における様々な事例を通じて見えてきたことは、交流の推進には、それに関わる方々の理解や熱意があってこそ、時間や経費を掛ける価値があり、片思いであっては一過性のものに止まらず、交流に関わろうとする双方の思いが一致した時に、交流が前に動き出すということです。

良好な日台関係を反映し、日本と台湾の官民を問わず、観光誘客を目的とした協定締結や覚書の交換がメディアを賑わす場面が多くなっていますが、今から30年ほど前、本県の大井川鉄道と阿里山森林鉄道との間には、鉄道に関する施設整備・事業経営面における実質的な交流を目指した姉妹提携が行われています。提携当時に関わった人々はすでに第一線を退かれています。熱い思いは受け継がれ、その交流は途切れることなく、現在に続いています。

東西に長い本県の伊豆半島のさらに南端に位置する南伊豆町では、「景勝地として有名な弓ヶ浜を、年間を通じて人が集う場所にしたい」という地元の方々の熱意が、海外からの参加者も交えて

年に数回開催されるオープンウォータースイミング大会に結実しました。

オープンウォータースイミングは、湖・海などの自然の水域を泳ぐいわゆる遠泳で、オリンピック北京大会から正式種目になっており、主に欧米やオーストラリアで盛んな競技です。

波穏やかな天然の内湾と白い砂浜が特徴の弓ヶ浜を擁する南伊豆町は、この競技を町の交流・誘客の核の一つと位置づけ、愛好者が多い国々から参加を呼びかけてきました。台湾の日月潭で毎年9月に3万人もの人が参加する世界最大級の大会にも積極的に出かけて交流したことに加え、大会の関係者や愛好者を招いて南伊豆町の良さを体験していただいた結果、今では毎年選手が参加するようになりました。

青少年交流では、野球やバスケの県高校選抜チームが台湾の強豪校との対戦を毎年実施しているほか、静岡県内の高校を訪日教育旅行で訪問する台湾の学校が次第に増えてきています。

さらに、誰もが気軽に楽しむことができるペタンク（コート上に描いたサークルを基点として木製の目標球に金属製のボールを投げ合って、相手より近づけることで得点を競うフランス発祥のスポーツ）の相互訪問での交流試合、お茶愛好家団体による台湾での茶文化交流等、多分野にわたる



注釈：弓ヶ浜（南伊豆町）での大会には、毎年、台湾からの参加者も



交流が次第に広がりを見せています。

このように、本県には期間の長短はあっても、交流に関わる人々の一致した思いによって交流が前に動き出している事例が多く、路線開設によりその動きが一層活発となっています。

### (3) ふじのくに静岡県台湾事務所の開設

鳥居信平と八田与一が、台湾でダムの建設に関わっていた時代から100年が経とうとしています。その間、日本と台湾はともに時代の荒波を乗り越えて来ました。一昨年の東日本大震災では、台湾の方々から温かい支援や励ましの声をいただき、胸を熱くした日本人は多いのではないのでしょうか。

本県は、先人から学び、台湾の方々に語り継がれるような一過性に流れない息の長い交流へさらに“脱皮”するため、巳年の今年4月、台湾台北市内に駐在員事務所を構えました。

事務所を構えた同日、台湾で最も高く、富士山と同様、地元の人々から聖山として親しまれている玉山と富士山に関わる民間団体が、友好山締



注釈：これまで交流のあった多くの台湾の関係者が開所を祝った

結に向けた覚書を取り交わしました。今後、山を巡る様々な分野の交流が盛んになるよう本県としても支援をしていきます。

そしてこの6月、富士山が世界文化遺産に登録されました。本県が富士山のように憧れを集め、誇りや尊敬の対象として存在する“ふじのくに”として、台湾の方々からも親しんでいただけるよう、駐在員事務所を十分に活用し、さらに積極的に取組みを進めていきたいと考えています。



ふじっぴー

(静岡県承認済)